

2021年11月7日（日）主日朝礼拝説教

『地を耕す』井上隆晶牧師
創世記2章4～15節、ヨハネ5章17～18節

①【労働は最初から人間に与えられていた】

私たちは日々色々な所で、色々な仕事をして働いています。労働は疲れることもありますが、喜びでもあります。今日は労働の意味について学びたいと思います。イスラエルを除く古代オリエントでは、人間が創造される以前は、神々がより偉大な神に仕え必要なものを作り出していました。神々は労働を嫌うようになり仕事を放棄してしまいます。そこで手を焼いた神は、神々に代わって働く者として人間を創造したと書かれています。このような創造観に立てば、人間の労働は神の奴隷のようなものであることとなります。では聖書はどのように労働を見ているのでしょうか。そのヒントが創世記に出てきます。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るよう

にされた。」（創世記2章15節）
神様は人間を創造すると共に、東の方にエデンの園を設け、そこに人間を連れて来て住ませ、エデンを耕し、守るようになされたとあります。人間が墮落する前から、神は人間に「土を耕す」ようにさせられました。労働は墮落による罰ではありません。人は働くように最初から創造されているのです。箴言26章13～15節では、怠け者の姿をからかい半分に、次のように述べています。「怠け者は言う。道にライオンが、広場にライオンが、と。扉はちょうつがいに乗って回転する。怠け者は寝台の上で寝返りを打つ。怠け者は鉢に手を突っ込むが、口にその手を返すことをおっくうがる。」箴言が怠け者をおおげさにかからかうのは、労働の重要さを教えるためです。人間の創造された目的から反れているからです。ではなぜ、人間に労働が課せられたのでしょうか。働かなければ、生きる糧を手に入れられないからでしょうか。それも確かにそうですが、労働の目的はそれだけなのでしょうか。人間はただ食べるだけの目的のために働くのではなく、心の中では別の目的を求めているのではないのでしょうか。

●あなたはなぜ牧師になったのですかと、良く聞かれます。私はもともと警察官になるつもりで大学卒業後、試験を受け、合格していました。しかし卒業前にクリスチャンになった私は、このまま警察官になるより、信仰生活をしっかりしたいという思いがあり、大阪に留まって地図とガイド書を販売する仕事を4年間ほどしました。その間に結婚し、子供も生まれました。もうすぐ4年目という時に、名古屋支社への転勤の辞令が出ました。名古屋では家が事務所兼倉庫になり、たった一人で周りの他県を営業に回らなければなりません。そんな時、私を教会に誘ってくれた大学の友人が東京で仕事を辞め、牧師になるため献身したという知らせを聞き、心の中でうらやましく思ったのです。「このままこの会社に命を捧げるのか、本当にこれでいいのか、ただ食べていく為だけに残りの人生を使うの

か、何か空しいなあ、何か本当に命を懸けれる仕事をしたいなあ」という思いがあったのです。そこで牧師に相談すると、「井上さん、牧師になりなさい」と言われたのです。そこで仕事を辞め、牧師になるために神学校に行きました。

人間は神の戒めを破り墮落した後、エデンから追放されます。このように書かれています。「主なる神は、彼をエデンから追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。」(創世記3章23節) エデンの園にいようが、エデンの外に追い出されようが、人には「土を耕す」ことが課せられているのが分かります。聖書は人間が罪を犯した時に呪われたものは「へび」と「土」とであると伝えています。「主なる神は蛇に向かっていわれた。『このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣のなかで、呪われるものとなった。』…神はアダムに向かっていわれた。『おまえのゆえに、土は呪われるものとなった。おまえは、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して、土はいばらとあざみを生えいでさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は額に汗を流してパンを得る。土に戻る時まで。』」(創世記3章14、19節) 苦しんで労働するようになったのは、大地が呪われたからであって、労働が呪われたからではありません。

②【労働の意味は人が神に似た者になるため】

労働は墮落による罰ではなく、最初から人間に与えられたものでした。では労働の意味はどこにあるのでしょうか。「彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。」(創世記3章23節)とあります。「土」をヘブライ語で「アダマー」といい、「人間」をヘブライ語で「アダム」といいます。人間が土から造られたからです。その「土を耕させる」という事は、自分自身を耕すということなのです。人は最初から完全な者として神に創造されたものではありません。完全な者になるようにプログラムされて創造されたのです。植物の種を割ると、将来の茎や芽になる部分が真ん中にすでに入っています。同じように将来、神の似姿になるようにプログラムされて、組み込まれて創造されているのです。そのプログラムを開花させ、育てるものが労働なのです。つまり人間が人間になるために必要なものだったということなのです。

私はイエス様がこういったことを思い出します。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから私も働くのだ。」(ヨハネ5章17～18節) 父なる神様が今日も働いておられるので、イエス様も働くと言われました。だから、人間も働かなければならないのです。世界が回復する日まで、神と共に働くのです。労働することによって、人は神に似た者、キリストに似た者となるのです。労働は「聖なるもの」であって、人を成長させ、成熟させるものなのです。

修道士たちは一日5時間祈り、5時間労働します。「5時間以上働いてはいけない」とも言っています。そして「労働は人間に磨きをかける」とも言っています。実際、労働することで私たちは、社会性を身に着けることができます。眠たくても置き、しんどくても動かなければなりません。また誰かの為に働くことによって自分の存在価値を知り、自己肯定感を高めることができます。労働は生き甲斐を与えま

す。労働といっても賃金を貰って働くだけが労働ではありません。家事も労働です。子育ても労働、介護も労働、奉仕も労働、すべてが労働です。祈禱することも労働です。だから修道士たちは5時間以上働くなといっているのです。既に聖堂で5時間労働しているからです。祈りが労働であり、体力勝負だという事は修道院の祈禱をやった人でなければ分かりません。レントの時の労働は大変なものです。朝、教会に来て祈禱すると、一日終わった気がします。祈りが労働だからです。

シャロン千里の高齢者施設に行く機会が増え、高齢者の皆さんとよく話をするようになりました。仕事から解放され、家事からも、子育てからも、夫の世話からも解放され、あらゆる労働から解放された皆さんは「自分は暇だ」と言われます。でも最後まで人間に残されている労働があります。いやそれは最初から最後まで、ずっと人生を貫いてきた労働です。それは自分を耕すという労働です。それこそアダムに最初から与えられた労働であり、高齢になってエデンの中の労働に専念できるのです。祈りは自分を耕す最上の労働です。神の言葉と、讚美と、涙と、聖霊で耕すのです。詩編 65 篇 12～14 節にこう書かれています。「あなたが過ぎ行かれる跡には油が滴っています。荒れ野の原にも滴り、どの丘も喜びを帯とし、牧場は羊の群れに装われ、谷は麦で覆われています。」神の過ぎゆかれる後には油が滴り、谷は麦で覆われるとあります。自らの心と魂の中を神に歩んでもらう事こそ「最上の労働」です。その時、豊かな実が結ぶからです。ヘルマン・ホイヴェルス神父の詩を知っておられると思います。

●最上のわざ（「人生の秋に」より）

この世の最上のわざは何？楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、失望しそうなときに希望し、従順に、平静に、おのれの十字架をになう。若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見てもねたまず、人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱ってもはや人のために役立たずとも、親切で柔和であること。

老いの重荷は神の賜物。古びた心にこれで最期の磨きをかける。まことの故郷へ行くために。おのれをこの世につなぐ鎖を少しずつ外していくのは真にえらい仕事。

こうして何も出来なくなれば、それを謙遜に承諾するのだ。神は最後に一番よい仕事を残して下さる。それは祈りだ。手は何も出来ない。けれども最期まで合掌できる。愛する全ての人の上に、神の恵みを求めるために。

全てをなし終えたら、臨終の床に神の声を聞くだろう。「来よ、わが友よ、われ汝を見捨てじ」と。

ゼノ神父は「ゼノ、死ぬ暇ない」と言いました。私たちが遊んでいる暇はありません。仕事が無いなどとは言ってはいけません。死ぬまで祈るという仕事、自分を耕すという仕事が残っているのです。祈りで自分を耕し、良い収穫の実を結び、それを神様にお献げしましょう。